

# ブランダー・マシューズと 19世紀末アメリカニズム

——英語をめぐる米英の対立——

鈴木 健 司

## Abstract

Brander Matthews, an American critic at the turn of the century, advocated for the legitimacy of American usage of the English language, as a part of his argument for the literary independence of the United States. In his early works, including “Briticism and Americanism,” his principal concern seems to have been in relativizing the values of various English used on both sides of the Atlantic Ocean. As American national power grew, his creed of Americanism (American nationalism) came to be more explicitly reflected in his works. Matthews was committed to spelling reform, which was supported by Theodore Roosevelt, his long-time friend and ally in the literary world. It was a social outcome brought by his works as a literary critic, combining academic expertise and a sense of mission.

## 序

独立革命から1世紀を経た19世紀末のアメリカは、急速な経済成長と海外進出を背景に国家としての威信を高める一方で、文化的には依然として未熟で洗練を欠くものと見られていた<sup>1</sup>。このことは庶民の生活に関わる事柄では言語の面で顕著であった。イギリスの言語が唯一の正統的な英語の規範として位置付けられ、そこから派生して発達したアメリカ英語独自の意味、用法、綴り等は下劣な逸脱として侮蔑される傾向にあった。20世紀半ばのアメ

リカ言論界で一世を風靡した批評家ヘンリー・ルイス・メンケン (Henry Louis Mencken, 1880-1956) が後に詳述したように、アメリカ英語は「野蛮で非文化的なもの」(barbarism) として扱われていた<sup>2</sup>。

そのような中、世紀転換期の言論界で活発に発言した識者の一人に、ブランダー・マシューズ (James Brander Matthews, 1852-1929)<sup>3</sup>がいる。自国文化にヨーロッパとは異なる独自の存在意義を見出すこと、とりわけアメリカ英語に正当な価値を付与することは、その重要な主題であった。民族の多様化が進行するアメリカにおいて、言語は国民統合の有効な手段であり、より良い言語を追求するマシューズらの発案による簡略綴りは、セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt, 1858-1919) 大統領を改革へと向かわせた。アメリカ的慣用の容認に留まらない、過度に急進的な綴り字改変を含む正書法確立の試みは、国内からも強い批判を浴びて失敗に終わったが、イギリスとは異なる英語の正統性という問題を提起するとともに、愛国的思想としてのアメリカニズムを前進させる機会となった<sup>4</sup>。

アメリカとイギリスで用いられる英語の差異自体については、経験に基づく多くの知見が一般に広く存在していることはもとより、意味論、語用論、英語史など言語学の諸分野における研究成果が多数存在している<sup>5</sup>。それに比して、アメリカが文化的独立を確立することを模索する中で、その英語が社会的にどのように受容され国民統合とナショナルアイデンティティの形成に寄与したのかについては、より多くの検証の余地が残されているように思われる。そのような歴史的文脈において役割を果たしたマシューズの言論もまた、再検討に値する。今日では忘れ去られているものの、彼の評論はアメリカ文芸界における最も重要な見解として、半世紀近くにわたり影響力を持ったのである<sup>6</sup>。

本稿では、アメリカ英語の正統性を論じるマシューズの文芸批評に見られる主張を通して、この主題に関する議論の展開を跡付ける。1892年刊行の『アメリカ語法とイギリス語法』(*Americanisms and Briticisms*)<sup>7</sup>を中心に、

彼の問題意識及び当時の英米社会における問題認識がいかなるものであったかを検証し、1901年刊行の『品詞』(*Parts of Speech*)<sup>8</sup>を中心に、彼の思想の深化について検討する。なお本稿中では原則として、「アメリカニズム」という語は、アメリカが文化的に独立した存在として認識する立場からの愛国的な信条や思想を指す語として、広義に使用する。アメリカ英語独自の語法を指す狭義では、文脈に応じて「アメリカ語法」または「Americanism」と表記する。アメリカで用いられている英語を一般的に指す際には「アメリカ英語」と表記する。

## 1 ブランダー・マシューズの英語批評

ブランダー・マシューズは、19世紀後半から20世紀前半のアメリカ言論界における有力な牽引役として活躍した。文芸批評家、エッセイスト、作家として『ハーパズ・マガジン』(*Harper's Magazine*)をはじめとする文芸雑誌を中心に執筆活動を行ったほか、教育者としてはコロンビア大学で教鞭を執った。文学書や教科書に序文や解説を寄せることも多く、当時の文壇での存在感が大きかったことを忍ばせる<sup>9</sup>。とりわけ演劇には造詣が深く、アメリカでフランス演劇の論評を続けた永年の功績が認められ、晩年にはフランス政府からレジオンドヌール勲章を授与されている。

マシューズは夥しい数の文章を発表したが、その活動分野は批評をはじめとして多岐に渡っている。作家ジュリアン・ホーソーン (Julian Hawthorne, 1846-1934) が著したアメリカ文学の教科書は、マシューズについて「その作品には外れがなく、多くは高い文芸的価値を有している」<sup>10</sup>と紹介している。アメリカ最古の文芸誌『スワニー・レビュー』(*The Sewanee Review*) には、彼の批評家としての能力を高く評価し、その仕事が創作を含む多彩な活動の中に埋もれてしまうことを危惧する記事が見られる<sup>11</sup>。

しかし結果としてその多才が、マシューズに対する同時代人や後世からの

評価を曇らせる一因ともなったことは否めないのではないか。キャリアの初期に発表された自作の小説、詩、演劇は、その後の時代に顧みられることが稀である。「最初のアメリカ文学教授」と呼ばれるフレッド・ルイス・パティー (Fred Lewis Pattee, 1863-1950) は、批評家としてのマシューズについて「アメリカの批評に輝かしい章を付加してはいるが、体系的な仕事というよりは副業であり余技であり、サント＝ブーヴと同じ意味で批評家と呼ぶことはできない」<sup>12</sup>と厳しい評価を下している。具体的問題に即し時宜に叶った批評の価値は、アメリカが大国として文化的にも存在感を増すに至って、急速に古びた。このような事情から、没後30年も経った頃には、マシューズはその名を冠した博物館のあるコロンビア大学以外では、事実上「忘れられた演劇人」<sup>13</sup>となってしまった。

ブランダー・マシューズは、ニューオーリンズで生まれ、ニューヨークで育った。父エドワードは建国父祖であるピューリタンの末裔で、母ヴァージニアはニューオーリンズ生まれのスコットランド系であった。対立する北部と南部に出自を持つ父母に生を受け内戦と再建という動乱の時代に少年時代を送ったブランダーにとって、南北再統一とアメリカの統合は家庭内で肌身を持って感じられる主題となり、アメリカニズムをめぐる後年の問題意識を形成する背景となった。貿易業で成功し富豪となった父は、息子に英才教育を施すための出費を惜しまず、ブランダーは私立学校で11歳からフランス語を学んだ<sup>14</sup>。マシューズ家は、たびたびヨーロッパ諸国に長期滞在し、1867年に万国博覧会開催中のパリでの生活は、ブランダーがフランスの演劇に傾倒する機会を与えた。ブランダーは1871年にコロンビア大学を卒業し、その後もしばしばヨーロッパを訪れた。成功者した一家であるマシューズ家のニューヨークの邸宅には、州知事をはじめ政界の著名人も出入りした<sup>15</sup>。

このように開かれた家庭環境で育った生い立ちが影響しているのか、批評家マシューズは文芸評論を閉じた世界に押し込めることを良しとせず、政治や社会との関わりの中で文学を論じることを好んだ。このような姿勢は、セ

オドア・ローズヴェルトに通じるところがある。マシューズとローズヴェルトは長年にわたって交友を温め、両者の出会いについては不詳であるが、遅くとも1888年以前からの知己であったことが、残された書簡により明らかである<sup>16</sup>。

ハーバード大学卒業後まもなく20代の若さでニューヨーク州議会議員として政界に進出したローズヴェルトは、執筆活動にも精力的で、1880年代には複数の歴史書を発表していた。1891年には「アメリカ歴史都市シリーズ」のニューヨーク篇となる書物を出版するが、版元であるロングマン・アメリカ支社の文芸アドバイザーとして、その執筆をローズヴェルトに委嘱したのがマシューズであった。その序文において、ローズヴェルトはマシューズの名前を挙げて謝辞を述べている<sup>17</sup>。マシューズの批評家としての才能を高く評価していたローズヴェルトは、評論をまとめて出版することを勧め<sup>18</sup>、その後1892年に刊行されたのが評論集『アメリカ語法とイギリス語法』である。頻繁な往復書簡により意見交換し友情を深めていく両者に共通する問題意識の核とも言うべき主題が、「アメリカニズム」であった。

元来アメリカに特有の英語の語彙や用法を意味するこの語は、次第にその意味を拡大し、金びか時代に不正な社会の有様をアメリカ的伝統として擁護する名目として用いられるようになった。後に大統領として改革を主導することになるローズヴェルトにとっては、そのような現状はもとより語の用法自体も見過ごせないことであった。そして、1894年に発表したエッセイ「真のアメリカニズム」において、「アメリカニズム」とは「愛国心」や「改革」と同様に、より真正な意味で用いられる語であることを説いた。政界での盟友であった上院議員で歴史家のヘンリー・カボット・ロッジ (Henry Cabot Lodge, 1850-1924) は、ローズヴェルトを追憶して次のように述べている。「彼は最期まで、何をおいてもアメリカニズムの信条——アメリカ政府の礎となり、真のアメリカ人が遍く心の奥底に持つべき原理、信念——を説くことに全力を尽くした」<sup>19</sup>。真のアメリカ人とは何か。この問題意識を共有す

るマシューズは、ローズヴェルトにとっていわば文壇での盟友であった。

問題の中心的概念であるアメリカニズムを軸として編纂された『アメリカ語法とイギリス語法』は、直近の2年間に発表した11篇の評論を集めたものである。表題作をはじめ、アメリカ英語の綴り、合衆国の文学的独立、批評の役割、アメリカ人作家などを主題とする評論が収められ、全体として、アメリカ人の言語とそれが織り成す文学が持つ独自の価値に正当な評価が与えられるべきことを主張している。冒頭には、トーマス・R・ラウンズベリー(Thomas Raynesford Lounsbury, 1838-1915)に宛てた書簡の形式をとった献辞が付加されている。マシューズは、イェール大学の英語英文学教授で批評家でもあったラウンズベリーを、英語史や合衆国初期アメリカ人作家の研究者として敬愛していた。その意味で、この献辞はこの評論集の主眼がアメリカニズムに貫かれていることを象徴しているのである。

1890年代を通じて、マシューズは英語の多様な諸相に焦点を当てた評論を多産し、1901年には英語を主題とする14篇の評論を集めた『品詞』を出版した。ここでは、英米語の差異やアメリカ英語の正統性の擁護といった従来からの主張に加え、将来における英語の変化と発展、あるいは言語の改良という観点からの議論が増していることが特筆される。これらの主張はまもなく、言論界という枠組みを超えて、社会的・政治的影響を伴う綴り字改革運動へと発展する。ローズヴェルトの大統領令による支持も虚しく、簡略綴りが社会に受け入れられることはなく、英語改革への期待は潰えた。それでも晩年に至るまで、マシューズにとってアメリカ英語の正統性とより良い英語の追求は重要な主題であり続けた。

『アメリカ語法とイギリス語法』は、これらの仕事の先駆けとなる初期の仕事の集大成であり、英語に関するマシューズの問題意識の出発点を明らかにするものである。また『品詞』は、その後の彼の思考の深化と体系的考察の跡を示すものである。以降の章では、これらの評論に示された問題についてマシューズの主張とその進展を見ていくことにする。

## 2 アメリカ語法へのイギリス人の批判

評論集『アメリカ語法とイギリス語法』の巻頭に収められた表題作のエッセイは、1891年7月の『ハーバース・マガジン』で発表され、初出時は「イギリス語法とアメリカ語法」という標題が付けられていた<sup>20</sup>。それまでのマシューズは、アメリカの文学的独立を主張する立場から、「最初のアメリカ人小説家」で「英語圏外で初めて出版されたアメリカ人著者」<sup>21</sup>であるジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper, 1789-1851）をはじめとするアメリカ人作家の価値を正当に評価することを評論における主要な課題としていた。「イギリス語法とアメリカ語法」は、彼らを含むアメリカ人が用いる言語に本格的に焦点を当て、それが貶められることの不当性について問題提起した初期の評論であった。

「アメリカ語法」を意味する Americanism という語は、建国の父祖の一人であるプリンストン大学長ジョン・ウィザースプーン（John Witherspoon, 1723-1794）が1781年に考案したというのが定説である。ウィザースプーンはこの語を、アメリカ英語の不適切な用例を指摘するエッセイの中で使用した<sup>22</sup>。一方「イギリス語法」を意味する Briticism という語は、1868年アメリカでの用例が最初とされ、「ニューヨークタイムズ」の記事において、awful を very と同義で使用することを指して「この誤用はイギリス語法である」と述べられている<sup>23</sup>。Briticism と Americanism をこの順序で並列したところに、基本から逸脱した語法がアメリカに限ったことではなく、むしろイギリスでより早くから起っている現象であることを指摘しようとする著者の意図が伺える。

ここで本題への導入としてまず話題となるのは、当時イギリスの植民地であったオーストラリアの英語である。オーストラリアの文学作品には彼の地特有の表現（Australianism）が頻出するため意味が通じにくいことが、

ローザ・キャンベル・プライド (Rosa Campbell Praed, 1851-1935) の作品に見られる具体的な単語<sup>24</sup>を挙げて指摘される。マシューズが疑問を呈するのは、これらのオーストラリア語法の侵略により英語が墮落するといった批判がイギリスの批評家たちから聞かれないことである。メルボルンの英語はロンドンの英語とは大きく異なるにもかかわらず、オーストラリア英語がイギリス人から攻撃されることはなく、カナダやインドの英語も同様であるという。非難の対象となるのは専らアメリカ語法であった。

マシューズも言及するように、19世紀後半においてイギリス人によるアメリカ語法批判として広く知られるのは、1863年にヘンリー・アルフォード (Henry Alford, 1810-1871) が出版した『クイーンズ・イングリッシュの擁護』 (*A Plea for the Queen's English*) である。カンタベリー司教であったアルフォードは、国語としての標準的な英語のあるべき姿について、Queen's highway が国有の公道を意味することに例えて、Queen's English とは「思想と言論のための大きな道」<sup>25</sup>であると定義する。そして国民の言語がその性格と歴史に反映されると述べたうえで、例として「我々のクイーンズ・イングリッシュがアメリカ人の手によって墮落していった過程を見るがよい」<sup>26</sup>と主張した。アメリカ語法への激しい攻撃はさらに続く。「彼らの言論や書物に見られる馬鹿げた言い回しや、見境のない誇張、整合性の軽視を見るがよい。彼の国民の性格と歴史を比較してみるがよい。人の道徳的責任や義務への感覚が鈍いこと。伝統的な正しさをあからさまに無視していること。世界史上最も残忍で規律のない戦争を無謀にも続けていること」<sup>27</sup>。

アルフォードの見解は当時のイギリスにおいても議論を呼び、とりわけ作家で評論家のジョージ・ワシントン・ムーン (George Washington Moon, 1823-1909) との論争は注目された。ムーンはアルフォードの掲げる論点の多くについて反論を述べ、その主張は論敵の職業と書名をもじり『ディーンズ・イングリッシュ』 (*Dean's English*) という嫌みに満ちた表題を冠して出版された<sup>28</sup>。そこにはアメリカ人が語末の -our を -or と綴ることや、It



is I の代わりに It is me<sup>29</sup> と言うことなどに関する議論も含まれているが、アメリカ語法自体が擁護されているわけではない。アルフォードによる告発から時を経た後も、なお同様の見方が継続して存在していることを、マシューズは問題視する。

当時のイギリス社会においてオーストラリア語法とアメリカ語法がどのように扱われていたのか、同時代の新聞記事から検証してみよう。マシューズが指摘するとおり、イギリス人がオーストラリアニズムを槍玉に挙げることは多くはなかったようである。イングランドの新聞において、Australianism という語がオーストラリア語法の意味で用いられるのは1866年に一例見られ、そこではこれをアメリカ英語と並べて醜いものとして論じている<sup>30</sup>。しかしその後は20年以上にわたってこの語の用例は見当たらず、ようやく1890年の記事でこの語が用いられるが、その内容はアメリカ語法に関する論評<sup>31</sup>やマシューズの見解への批判<sup>32</sup>といったものであり、オーストラリア語法が卑俗なものとして非難されることは稀であった。

カナダ英語についても同様のことが言える。Canadianism という語は、1867年のカナダ自治領結成以前に Lower Canadianism, French Canadianism などの形でナショナリズムを論じる文脈で用いられているが、用例は多くない。マシューズの時代になってからも、カナダ語法が議論の対象とされた形跡は見当たらない。

これに対して Americanism という語は、19世紀初頭にはすでにイギリスでも使用されていることが確認できる。1860年代からその頻度は増し、マシューズの評論への注目の影響もあり、19世紀末の20年間には増加傾向が顕著である。当時のイギリスの新聞における使用状況はどうであったか。ロンドンの有力紙であったタイムズ (*The Times*)、ガーディアン (*The Guardian*)、デイリーニューズ (*Daily News*) で、Americanism という語が用いられる記事の数(広告のみの使用は除く)を数えた結果は、別表のとおりである。

表 ロンドンの新聞における“Americanism”使用記事数（1881-1900年）

年	1881	1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990
The Times	0	1	2	1	0	2	3	4	2	7	5	0	4	1	0	4	6	4	14	4
The Guardian	0	4	1	4	1	1	3	7	2	8	11	4	5	4	12	8	9	12	21	5
Daily News	3	6	0	4	1	2	7	6	2	6	2	6	7	4	4	2	0	3	3	3

<https://www.newspapers.com/> より作成

19世紀末イギリスの新聞記事では、Americanism という語はしばしば否定的な形容詞と共に用いられている。例を挙げれば、vulgar（俗悪な）<sup>33</sup>、quaint（奇妙な）<sup>34</sup>、vicious（乱暴な）<sup>35</sup>、ungrammatical（非文法的な）<sup>36</sup>、forcible（無理やりの）<sup>37</sup>、irritating（耳障りな）<sup>38</sup>、detestable（憎むべき）<sup>39</sup>、hideous（忌まわしい）<sup>40</sup>、ugly（醜い）<sup>41</sup>、debased（品のない）<sup>42</sup>などである。語の成立背景を踏まえれば、Americanism が否定的な意味合いを持って使用されることは自然な流れであったかもしれない。それにしても、多様な形容詞を付加してアメリカ語法への嫌悪と侮蔑を強調することが多かったという事実は注目に値する。

決まり文句と言えるほど頻出するのは、to use an Americanism と断ったうえで引用符付きのアメリカ語法を用いて叙述する形である。中には to borrow an expressive Americanism のような表現を用いて、積極的にアメリカ英語のニュアンスを生かして記述していることを強調するものも、少なからず見られる<sup>43</sup>。しかし総じてみれば、アメリカ英語に自国の言語と同等の価値を認めていたというよりは、文章に活力を与える香料のような効果を期待して、時に都合良く利用していたというのが実情と言えるだろう。

アメリカ語法への攻撃は、その言語を用いて生み出される文学にも及んだ。ルーザ・メイ・オルコット（Louisa May Alcott, 1832-1888）の最晩年の短編集『花物語』（*A Garland for Girls*）は、イギリスで次のように酷評されている。「7篇の短編が収められているが、かなり冗長で、無意味なアメリカニズムに毒されており、イングランド人の耳には不快である。馬鹿な若

者を *dude* と呼ぶなどつまらない俗語があつて下品だ<sup>44</sup>。

アメリカ国内においても、アメリカ英語をイギリス英語の下に置く見方は存在した。月刊誌『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*)の記事には次のような意見が掲載されている。「アメリカ人の語彙はイギリス人よりも多いが、数でアメリカが上回っているとしても、イングランド人には彼らの母語に対して一定の権利があり、アメリカ人はそれを尊重する義務がある」<sup>45</sup>。

アメリカには植民地時代以来の文学的伝統・知的伝統があり、19世紀にはその独自性を主張する動きが相次いだ。しかしそれがイギリスにおいて同様に評価されたとは言い難く、ジャンルとしてのアメリカ文学も当時はまだ確立されていなかった。単なるイギリス文学からの派生的ではなく、アメリカ文学独自の価値の承認を追求するマシューズにとって、その英語の特徴を理由として文学が貶められることは、容認できるものではなかった。彼が少年期よりヨーロッパでの生活を経験してその文化的土壌を自身の一部として体得していたことは、欧米を相対化して見る視座を養い、アメリカニズムの信条を深化させることに大いに寄与したと考えられる。マシューズの議論は、イギリス人によるアメリカ英語批判に対して実証的に反駁する方向へと向かうことになる。

### 3 アメリカ語法から世界語へ

マシューズは、イングランド人が自国と他国を比較して優越感を持たずにはいられない国民であることを批判する<sup>46</sup>。アメリカ人俳優ジョゼフ・ジェファーソン (Joseph Jefferson, 1829-1905) が演じる「リップ・ヴァン・ウインクル」(Rip Van Winkle) の舞台は大きな評判となり、あるイングランド人女性は芝居を気に入ったものの、役者のアメリカなまりを残念がったという。アメリカの田舎の猟師であるリップがアメリカの発音によって演じ

られることは、本来、物語の世界を忠実に表現していると評価されることであろう。にもかかわらず前述のような感想が出てくるところに、アメリカ英語に対する嫌悪と偏見の深さがうかがわれる。このような例を挙げつつマシューズは、イングランド人の非難の対象が18世紀にはアイルランド語法やスコットランド語法であったものが、19世紀にはアメリカ語法へと移ったことを指摘する。友人でもあった批評家ウィリアム・クレイリー・ブラウネル (William Crary Brownell, 1851-1928) の著作から引用して述べるように「学歴のあるイングランド人<sup>47</sup>を最も落胆させるのは最も教養あるアメリカ人の言葉である」<sup>48</sup>。しかし、このように国民によって異なる語法に優劣をつけることにこそ誤りの根源があると、マシューズは考える。

イギリス人がアメリカ英語を乱れた言語として扱うことは、どのような意味において不当であるのか。マシューズは「アメリカ人にとって耳障りなイギリス語法もある」<sup>49</sup>という言い方で両国の語法を対等な関係に位置付けたうえで、そもそも一般に Americanism として問題視される語には、イギリス由来によるものが少なからず含まれていることを指摘する。例えば、like を as の意味で用いるのはアメリカ南部とされるが、イギリスでも日常会話で用いられるだけでなく、エッセイストのコッター・モリソン (Cotter Morrison, 1832-1888) やジャーナリストのウォルター・バジヨット (Walter Bagehot, 1826-1877) など著名な文筆家の文章中にもこれらの用例が存在するという<sup>50</sup>。また、different from の代わりに different to を用いたり、as soon as の意味で directly や immediately を用いたりするのは、アメリカ人著者には見られない比較的新しいイギリス語法であるという<sup>51</sup>。

「イギリス語法とアメリカ語法」では、このようなイギリス語法による英語の改変やアメリカ語法との相違が、上記のほか多数の例によって示される。これらの例によりマシューズは、英語の変化がアメリカをはじめとする旧イギリス植民地に限らずイギリス自体においても生じていることを指摘し、アメリカ語法を問題視することの不当性を主張した。その趣旨は、英米の優劣

を論じるのではなく、不用意にローカリズムに陥ることなく言語に固有の原則に従って適切な語選択を行うことの重要性を説くことにあった。完全に純粋な言語などというものは存在せず、イギリス人もアメリカ人もそのような言語を持つことはできない。言語は多様化して当然であり、イギリス語法、アメリカ語法、オーストラリア語法といった地域に特有の言語の存在は、健全な活力の証しである<sup>52</sup>。このような議論により、マシューズは各国の多様な英語の語法を等しく価値あるものとして評価する。

結びの段落には、この時点でのマシューズの立場を明確に示す記述が現れる。「地球を取り囲むアングロ・サクソン国家のうちのどこか一国が直ちに政治・経済・文学の中心となることは考えにくい。しかし、アングロ・サクソン民族の中心となる一派が最良の英語を使い、その標準言語が他にも受け入れられるようになることは確実だろう」<sup>53</sup>。文学評論においてはイギリス文学からは独立したアメリカ文学の価値の確立を目指したマシューズであるが、言語に関しては、この時期にはアメリカを突出した存在として論じるのではなく、英米両国の当時の主流文化を形成した「アングロ・サクソン民族」を主語として主張を展開していることは興味深い。その背景には、一般論として、文学と比べれば言語には国民独自の文化的要素の反映が見出しにくいことがあっただろう。さらには、アメリカ英語の標準化をめぐる当時の情勢も関連していると考えられる。

ノア・ウェブスター (Noah Webster, 1758-1843) が、7万語の見出し語から成る『アメリカ英語辞典』(*An American Dictionary of English Language*) を刊行したのは1828年であった。多数の新語やアメリカ語法を収録するとともに複雑な綴りを簡略化して掲載した彼のウェブスターの辞書は、その後改訂を重ねたが、彼の死後に刊行された1890年改訂版では『ウェブスター国際辞典』(*Webster's International Dictionary*) という名称が冠された。アメリカ人の標準言語の確立を目指したウェブスターの立場からすれば、「国際」という語は不本意であったかもしれない。『アトランティック・

マンズリー』に掲載された著者不詳の長文の論考は、ウェブスターの個性を消した1884年版との比較から、この新しい辞書がオリジナルなアメリカ語法の要素を復活させながらも伝統的な語法を併せて掲載していること<sup>54</sup>に注目している<sup>55</sup>。イギリスで正統的とされる従来の語法と並列させることは、アメリカ語法の正統性を確立する過程における、一種の戦略であったとも言えるだろう。「イギリス語法とアメリカ語法」におけるマシューズの論法には、ウェブスター1890年版の編集方針と共通するものが読み取れる。

このような時代を経て、その後のマシューズの言語への問題意識の中心は、英語の将来を論じる方向へと向かっていくことになる。世紀転換期を迎えてマシューズはさらに精力的に執筆に励み、英語を主題とする評論を立て続けに発表した。その幾つかを概観し、彼の意識変化をたどってみよう。

1898年に発表された「言語の将来」(The Future of the Language)<sup>56</sup>では、その後の世界の支配的な言語となるのはどのような英語であるかについて、見通しを述べている。その予測によれば、英語の将来を決定付けるのに大きく影響するのはアメリカであり、将来の英語は現在アメリカで使われている英語であるという。そのような言語を子孫に伝えていくのが務めであるという結論により、議論は締めくくられる。将来におけるアメリカ英語の優位性への言及は、マシューズのアメリカニズムの前進を如実に示している。

1899年に発表された「アメリカ合衆国における英語」(The English Language in the United States)<sup>57</sup>では、アメリカ合衆国の言語とは何を意味するのかが問い直される。アメリカの言語といえば、イギリスの批評家がアメリカ人による英語の劣化を非難するのに対し、マーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)が、アメリカ人が使っているのは英語ではなくアメリカ語である(not English but American)と主張したことが想起される。しかし、マシューズはこの立場を採らず、アメリカ英語もまたイギリス英語と同様に英語の一派であると考えた。両国の言語の相違は主として話し言葉におけるものであり、書き言葉が大きく異なる事態は生じていないこと

が、その理由である。マシューズは従来から、英米の言語の差異がポルトガル語とスペイン語ほどまでに広がってしまうことは考えにくいとの認識を示していた<sup>58</sup>。英語を一つの言語として捉え、英米を結び付ける共通の絆として解釈する立場は、ここでも一貫している。

アメリカ人が独自の語法を発達させそれによる文学的成果を築いていることを誇りつつも、マシューズは英語を特定の国民の占有物とはとらえず、アメリカ語法を含む多様性を英語という一つの言語の発展に貢献するものとして考える。アメリカ英語をイギリス英語から独立した派生物として扱うのではなく、英語という一つの言語への貢献について英米を並列的に論じていることが、アメリカがイギリスからの知的独立を達成し文化的に対峙できる存在であるという意識をより際立たせていると言えるのではないか。

英語の現代イギリス語法が現代アメリカ語法に対して優越する権威となることはないを確認したうえで、マシューズは「英文学の中のアメリカ派 (American branch of English literature) が質量とも優勢になれば権威の中心がどこになるかは明らかだ」<sup>59</sup>と主張する。19世紀におけるイギリスの文学上の優位を認めつつ、20世紀においてはそれが継続するわけではないことに注意を喚起するのである。ここでは、言語の問題を明確に文学との関連で論じている点で、英語英文学を一体のものとして考察するマシューズの本領が発揮されており、前年の議論はさらに精緻化されている。

アメリカ英語が主流言語となるには、その前提として、イギリス人に受容されるようになることが不可欠である。それはなぜ可能になるのか。この問題に答えるのが、アメリカの言語に関する論考と同年に発表された「イギリスの言語」(The Language in Great Britain)<sup>60</sup>と題する一篇である。ここでは、マシューズは例によって、イギリスに特有の語法 (Briticism) が教養あるイギリス人の間でも広く用いられていることを指摘することにより、アメリカ語法の特異性が無教養の産物ではないことを確認する。そのうえで、アメリカ人著者による出版の増加に伴いイギリス人読者がアメリカ的用法に

慣れつつあることや、普通教育の浸透により過去を学んだアメリカ人はある面ではイギリス人より保守的な部分もあることなどを根拠として、アメリカ英語がイギリス人にも受容可能な言語となりうることを示唆した。さらに、英語による優れた文学を共に誇りとして言語による団結に向かって進むことがイギリス人とアメリカ人の両者にとって共通の財産となると述べつつ、英語英文学の中心が次第にアメリカに移行することは不可避であると断言するのである。アメリカ語法の受容の拡がりとそれによる文学の隆盛、および国内における出版の増加等によって裏付けられるアメリカの文化的充実が、マシューズに自らの主張への確信を与えたと言えるであろう。

#### 4 マシューズと綴り字改革

マシューズのアメリカニズムを論じるにあたっては、彼の綴り字改革に対する関心と情熱についても付言しておかなくてはならない。世界語としての英語の普遍性を獲得するうえで重要な課題と考えられたのは、英語の綴りと発音の関係に不一致や不統一が存在することを克服することであった。文壇における議論を机上の空論に終わらせることなく社会的に実益をもたらすことが可能になるという意味で、綴り字の改良には批評家にとって重要な仕事となった。

マシューズは1901年に発表した「英語綴りの簡略化」(The Simplification of English Spelling)<sup>61</sup>で、旧来より英語に綴りと発音の不整合が固定的に容認されてきたものではなく、発音に即した綴りへの改変が不首尾に終わりながらも試み続けられてきたことを指摘し、次のように述べている。「英国式であれ米国式であれ、現行の綴りに聖域はないことを示すことから始めなくてはならない。(中略) 英語正書法の不規則を正そうとする試みは、英語自体とほぼ同じほど古いのである」<sup>62</sup>。

英米両国において幾多の綴り字改革の試みが散発的に発生してきたにもか



かわらず、結局、成功することがなかったのはなぜか。マシューズはその理由を、一つには議論が学術的に過ぎる傾向があったこと、もう一つには主張を社会に普及させるための経済的基盤が不十分であったことであると考えた<sup>63</sup>。彼自身にとって幸運であったのは、前者についてはセオドア・ローズヴェルト、後者についてはアンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie, 1835-1919）の支援に恵まれたことである。

ローズヴェルトは、前述のように、古くからマシューズの理解者であった。1891年には彼自身の信条に合致する「イギリス語法とアメリカ語法」を二度読み、さらに何回か読むつもりである旨、マシューズ宛の書簡に書き記している<sup>64</sup>。マシューズは1892年に発表した「アメリカの綴りについて」(As to American Spelling)<sup>65</sup>で、-ck に代わる -c、-re に代わる -er など多数の具体例について考察しつつ、アメリカ英語におけるこれらの展開が英語の秩序を崩壊に導いているというイギリスからの批判に対抗して論陣を張った。彼によれば、イギリス人がアメリカ綴りを醜悪なものとして非難するのは、彼らが英語を自己の占有物という前提の下、アメリカ人をそれに不当に干渉する外部の野蛮人とみなす暗黙の了解に起因している。イギリス人にとってアメリカ綴りの逸脱は我慢ならないものであると保守的な論者は主張するものの、現実にはロンドンの新聞はアメリカ綴りを採用しつつあり、読者もそれを受容している。綴りの瑣末な差異を「アメリカ綴り」として問題視すること自体が、マシューズから見れば不当なのである。

ローズヴェルトはこれについても、著者に大きな賛辞を書き送っている<sup>66</sup>。本作を皮切りに、マシューズは綴り字改革に関する考察を深化させ、アメリカ英語のあり方に関する問題意識をローズヴェルトと本格的に共有していくことになる。

ローズヴェルトは書簡でマシューズ夫人や娘にもたびたび言及しており、彼らの親密さが伺える。その交友関係と書簡の往復は、ローズヴェルトが義勇軍を率いて米西戦争に赴いた年も絶えることなく続いた。1901年9月、

マッキンリー大統領の暗殺により副大統領からホワイトハウスの主となったローズヴェルトに対してその重責を気遣う書簡をマシューズは送り<sup>67</sup>、大統領もまもなく返信してワシントン訪問の予定を尋ねている<sup>68</sup>。

1906年にマシューズは、カーネギーの基金提供による英語綴り字改革委員会の委員長となり、300語の簡略綴り字リストを策定した。大統領2期目を迎えていたローズヴェルトは、マシューズの仕事を全面的に支持しており、綴り字政府文書の印刷にこの簡略綴りを用いるよう大統領令を発令したが、世論の反対を受けてこの試みは頓挫した。マシューズの著作には、晩年に出版された自伝に至るまで、although に代わる altho などの簡略綴りが（読みやすさを損なわない程度に）散見される。このことに、社会改革として失敗した後も消えることがなかった彼の信念が伺われるのである。

## 結 び

ブランダー・マシューズは、アメリカの文学的独立に関する主張の外延として、英語のアメリカ語法の正統性の社会的承認を目指してその根拠の検証に努めた。その初期の評論はアメリカ語法とイギリス語法を並列することにより価値の相対化を主張しており、言語論としての性格が強い。しかし世紀転換期以降、アメリカが国家として急成長するにつれ、その評論はアメリカニズムの色を濃くしていく。綴り字改革に向けた奮闘は、彼の英語英文学への知見と社会的問題意識を結合する意義を持っていた。

20世紀も半ばになると、アメリカは超大国となり、世界の言語状況において占める位置も変化した。長年にわたり Americanism として貶められたアメリカの言語は、イギリスの言語と並び立つ存在となり、英語のもう一つの標準として世界に伝搬している。アメリカ発の英語が世界を席卷して、マシューズの予言が現実のものとなった現代において、彼の論点はどのように意味を転じているだろうか。

19世紀から20世紀を通じて英語はアメリカの事実上の国語であり、時にそれは先住民ネイションの少数言語に対する弾圧につながるほどであった。しかし世界語としての英語が揺るぎない地位を確立する一方で、アメリカ国内においては社会の多民族化に伴って状況は変化し、英語の絶対的な地位は揺らぎつつある。1981年には英語を合衆国の公用語に指定する憲法修正案が上院に提出されたが、不成立に終わった。以来、英語に国民統合の装置としての機能を求めるべく、公用語化を目指す政治的努力が続けられており、数々の法案が上程されたものの、法制化の見通しは立たない。建国以来、英語がアメリカニズムの源泉であり続けている事実は変わらないが、人口動態が大きく変化し、マシューズの時代とは異なるところに目標が置かれることになった。

英米両国の英語の関係をめぐる議論の様相も変化した。Americanism という語はナショナリズムとの関わりで思想・信条を表す言葉として残存し、とりわけ anti-Americanism という形では頻繁に用いられるが、アメリカ語法を蔑む文脈で使用されることはほぼなくなった。むしろイギリス英語に特有の語法が、Britishism という語を用いて論じられることが増えつつある<sup>69</sup>。アメリカ英語が主要言語としての地位を確立した現代では、これまでとは反対に、イギリス英語がアメリカ英語を浸食しているという観点が生まれ、そのような現象を表す Anglocreeper という新語も登場している<sup>70</sup>。世界中で多種多様な英語が是認されるようになった現代においても、英米両国の言語が規範としての一定の役割を果たしていることは否定できない。二つの英語の攻防は、マシューズの時代からさらに世紀を超えて、新たな局面を迎えているようである。

#### 註

- 1 アメリカ文化史研究者ローレンス・W・レヴィーンは、アメリカが政治的独立を達成した後も、文化的には「植民地的心情」を抱き続けてきたことを指摘する。

- Lawrence W. Levine, *Highbrow/Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America*. (Cambridge: Harvard University Press, 1988). 2.
- 2 H. L. Mencken, *The American Language*. (New York: Alfred A Knof, 1919). 25-30.
- 3 母方の祖父の名を取り James Brander を洗礼名として授けられたが、幼少期より専ら Brander と呼ばれて育った。そのため文筆活動の開始当初は J. Brander Matthews と名乗ったが、J. B. Matthews と略されて目立たなくなることを避けるため、Brander Matthews を筆名に定めた。Brander Matthews, *These Many Years*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1917). 35, 253.
- 4 詳細については下記を参照。鈴木健司「セオドア・ローズヴェルトの綴り字改革——遮られたアメリカ語の追求」*Asphodel* 49, 2014. 17-38.
- 5 共時的観点からは、コーパス言語学の手法を用いて英語と米語の用例を統計的に分析し、両語の差異に関する言語学的知見を俯瞰するものとして、下記の文献がある。Paul Baker, *American and British English: Divided by a Common Language?* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017). 通時的観点からは、アメリカにおける英語の新たな語彙や用法の発生について多数の具体例を示しつつアメリカ英語の発達史を概説したものとして、下記の文献がある。Matthew Engel, *That's the Way It Crumbles: The American Conquest of the English Language*. (London: Profile Books, 2017).
- 6 Jack E. Bender, "Brander Matthews: Critic of the Theatre," *Educational Theatre Journal*, Vol. XII, No. 3, October, 1960. 169-176.
- 7 Brander Matthews, *Americanisms and Briticisms: With Other Essays on Other Isms*. (New York: Harper and Brothers, 1892).
- 8 Brander Matthews, *Parts of Speech: Essays on English*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1901).
- 9 没後コロンビア大学に寄贈されたマシューズの蔵書には、トーマス・ハーディ著『テス』(1891) やマーク・トウェイン著『ハドリバークを墮落させた男』(1900) などの著者からの献辞入り献本が含まれている。Travis McDade, *Thieves of Book Row: New York's Most Notorious Rare Book Ring and the Man Who Stopped It*. (Oxford: Oxford University Press, 2013). 142. なおハーディは綴り字改革には強く反対した。
- 10 Julian Hawthorne and Leonard Lemmon, *American Literature: a Text-book for the Use of Schools and Colleges*, (Boston: D. C. Heath, 1895). 300.
- 11 W. P. Trent, "Mr. Brander Matthews as a Critic," *The Sewanee Review*, (1895). 373.

- 12 Fred Lewis Pattee, *A History of American Literature Since 1870*, (New York: Century, 1915). 433.
- 13 Jack E. Bender, "Brander Matthews: Critic of the Theatre," *Educational Theatre Journal*, (Vol. XII, No. 3, October, 1960). 169.
- 14 学校生活自体はマシューズにとって退屈なものと感じられ、自伝にはその教育内容の低さを厳しく批判する記述が見られる。Brander Matthews, *These Many Years*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1917). 63.
- 15 ハミルトン・フィッシュ (ニューヨーク州知事)、タウンゼント・ハリス (初代駐日公使)、ジョン・ヘイ (リンカーン大統領の秘書、後にセオドア・ローズヴェルト政権では国務長官) など。Lawrence J. Oliver, *Brander Matthews, Theodore Roosevelt, and the Politics of American Literature, 1880-1920*. (Knoxville: University of Tennessee Press, 1992). 4.
- 16 Lawrence J. Oliver, ed., *The Letters of Theodore Roosevelt and Brander Matthews*, (Knoxville: University of Tennessee Press, 1995). xix.
- 17 Theodore Roosevelt, *Historic Towns: New York*. (New York: Longmans, Green and Co., 1891).
- 18 Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, January 29, 1891. Oliver, ed., *Ibid.* 24.
- 19 Henry Cabot Lodge, *Theodore Roosevelt*. (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1919). 31.
- 20 Brander Matthews, "Briticisms and Americanisms". *Harper's Magazine*, July 1891. 215-222. 以下、本稿における引用に際しては、"Americanisms and Briticisms" と改題のうえで収録された評論集 *Americanisms and Briticisms* のページを示す。
- 21 Brander Matthews, "The Centenary of Fenimore Cooper." *Century*, September 1889. 796. *Americanisms and Briticism* にも所収。89-113.
- 22 *The Pennsylvania Journal*, May 9, 1781.
- 23 *The New York Times*, August 3, 1868. 3.
- 24 dingo, scrub, damper, wallaby, billy, swag, tracker, grub, cou-ee, fig, yarn, bandicoot, newchum の13語。
- 25 Henry Alford, *A Plea for the Queen's English: Stray Notes on Speaking and Spelling*, (London: Deighton, Bell, 1864). 2.
- 26 *Ibid.* 6.
- 27 引用部最後の一節は、当時継続中であったアメリカの内戦「南北戦争」(1861-65)を指す。

- 28 G. Washington Moon, *The Dean's English: A Criticism on the Dean of Canterbury's Essays on the Queen's English*. (London: Hatchard, 1864).
- 29 マシューズは、英語の It's me はフランス語の C'est moi と同等の機能を果たすという理由により容認されるべき表現であるとコロンビア大学の学生に教えたという。W. Safire, "On Language," *New York Times*, September 25, 1983.
- 30 *The Pall Mall Gazette*, March 31, 1866. 2.
- 31 *The Guardian*, May 13, 1891. 5.
- 32 *The Guardian*, January 23. 4. これはオーストラリアの *Melbourne Argus* の記事の紹介であり、そこではマシューズがオーストラリアニズムとして挙げる13語のうち5語はこの国に特有とは言えないこと、dingo や wallabi などはこの国独自の事物であることなどが指摘されている。
- 33 *Daily News*, December 8, 1884. 5.
- 34 *Daily News*, October 19, 1885. 2.
- 35 *The Times*, June 16, 1886. 7.
- 36 *Daily News*, January 6, 1887. 3.
- 37 *Reynold's Newspaper*, March 20, 1887. 5.
- 38 *Birmingham Daily Post*, December 18, 1887. 7.
- 39 *The Guardian*, March 2, 1889. 8.
- 40 *The Newcastle Weekly Courant*, August 20. 3.
- 41 *The Morning Post*, August 24, 1889. 3.
- 42 *The Newcastle Weekly Courant*, December 28, 1895. 4.
- 43 *Daily News*, September 9, 1884. 4.
- 44 *Birmingham Daily Post*, December 21, 1887. 7.
- 45 Anonymous, "The Contributors Club." *The Atlantic Monthly*, December 1890. 850.
- 46 Matthews, "Americanisms and Briticisms." 8.
- 47 ブラウネルはマシューズの父の友人の息子で、少年時代の1864年に最初に出会った。後年マシューズが「ネイション」(*Nation*)に寄稿した際に編集者として再会し、それ以降、交友関係を持つことになった。Matthews, *These Many Years*. 98.
- 48 Matthews, "Americanisms and Briticisms." 10. William Crary Brownell, *French Traits: an Essay in Comparative Criticism*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1888).
- 49 Matthews, "Americanisms and Briticisms." 15.
- 50 *Ibid.* 16.

- 51 Ibid. 18.
- 52 Ibid. 29.
- 53 Ibid. 31.
- 54 例えば、簡略綴りの rime と伝統的綴りの rhyme など。
- 55 Anonymous, "The International Dictionary," *The Atlantic*, March 1891. 406-413.
- 56 Brander Matthews, "The Future of the Language." *Part of Speech*, 29-43.
- 57 Brander Matthews, "The English Language in the United States." *Parts of Speech*, 47-77.
- 58 Matthews, "Americanisms and Briticisms." 30.
- 59 Matthews, "The English Language in the United States." 76.
- 60 Brander Matthews, "The English Language in Great Britain." *Parts of Speech*, 81-94.
- 61 Brander Matthews, "The Simplification of English Spelling." *Parts of Speech: Essays on English*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1901). 319-340.
- 62 Ibid. 323.
- 63 Matthews, *These Many Years*. 441.
- 64 Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, June 23, 1891. Oliver, ed., *Letters*. 26.
- 65 Brander Matthews, "As to American Spelling." 32-59.
- 66 Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, June 27, 1892. Oliver, ed., *Letters*. 38.
- 67 Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, September 22, 1901. Oliver, ed., *Letters*. 121-122.
- 68 Brander Matthews, Letter to Theodore Roosevelt, September 25, 1901. Oliver, ed., *Letters*. 122.
- 69 オックスフォード英語大辞典 (OED) によれば、この語は1853年にアメリカで用いられたのが最初であるが、当初の意味は「イギリス人に特有の性格」ということであり、イギリス英語を指すようになるのは後のことである。この点、Americanism の語義とは逆方向の進化となった。
- 70 Alex Williams, "Is British English Conquering America, or Vice Versa?" *New York Times*, April 13, 2018.